



# 和's YAMATO

(わづやまと)

2022  
初春号



「山茶花のかおり」F6号 須藤和之 画  
ヤマトビオトープ園にて

- 写真で楽しむ群馬の自然～桜山公園～
- シリーズ群馬の芸術家「松本忠義」
- お客様紹介「絶景日帰り温泉 龍宮殿本館」様
- 郷土史跡めぐり「中塚古墳」
- 源氏の旗揚げ 源頼朝、伊豆配流から鎌倉へ  
《神社仏閣から歴史を学ぶ》
- 浅草寺一山 善龍院住職 清水谷尚順師



## 写真で楽しむ 群馬の自然～季節の花～

### 桜山公園

藤岡市  
三波川2166-1



桜山公園の冬桜

写真「ぐぐっとぐんま写真館」から転載

表紙の絵「山茶花のかおり」

### 須藤 和之 Kazuyuki sutoh プロフィール PROFILE

1981年 群馬県前橋市生まれ

2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠巒)(同2011~20) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~21) 2013年 アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ・未来への対話」出品、群馬銀行創立80周年記念 収蔵作品「群馬の四季」制作、慶應義塾大学非常勤講師(2013-2020) 2014年 個展(日本橋三越本店) (同2017,20) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト) 2019年 高崎市タワー美術館トップランナーⅢ出品 2020年 上毛芸術奨励賞受賞 現在 日本美術院院友

OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL: <http://sutooo.net/>



和's YAMATO

(わづやまと) 初春号 2022 (第51号)

### 【和's yamato】の由来

ヤマトの漢字の「和」、Water&Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和's YAMATO 初春号 2022年(令和4年)1月発行

発行:株式会社ヤマト(広報室)群馬県前橋市古市町118 tel:027-290-1891 fax:027-290-1896

建設プロダクト

株式会社ヤマト 群馬県前橋市古市町118 〒371-0844 TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896

支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森  
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター

ヤマトホームページ [www.yamato-se.co.jp/](http://www.yamato-se.co.jp/)



# 源氏の旗揚げ

「蛭ヶ島の夫婦」の像

(監修・歴史家・文学博士 安藤優一郎氏 文・木下直也)

## 源頼朝、伊豆配流から鎌倉へ

源頼朝は治承四年(一一八〇)、三十四歳の時に、平家打倒のために旗揚げ(挙兵)します。十四歳の時に平治の乱で平家に敗れて伊豆に流されてから二十年後のことです。旗揚げした当初、関東の武士は平家に従属するものが多く、石橋山の戦いに敗れ安房に撤退します。安房で再起し、上総、下総、武藏国を経て、鎌倉に入り、武家政権の礎を築きます。

### 武士の台頭と莊園の発達

飛鳥時代、奈良時代(五九二年～七九年)は、日本の国民とすべての土地は天皇のものでした(公地公民制)。奈良時代の中期には、公地公民制は徐々に機能しなくなっています。重税により、国民は土地の開拓意欲が衰え、公地は荒廃して朝廷の租税は減少していました。聖武天皇(在位・七二四年～七四九年)は、天平五年(七四三年)に墾田永年私財法(こんでんえいねんしげいほう・自分で開墾した田畠や土地の永久的な私有を認めた法律)を発布します。これによ

り、貴族や寺社が中心となり、私有地を増やしていました。この私有地を初期莊園と呼びます。

莊園を開発する領主は、土地を守るために武装した武士団をつくるようになります。武士団は、臣籍降下(しんせきこうさ)・皇族がその身分を離れ、姓を与えられて臣下の籍に入ること)によって生まれた賜姓皇族(しせいこうぞく・天皇の子孫が臣下の籍に入つて姓を与えられたもの)のもと集結していきます。賜姓皇族は、中央の政治では藤原攝関家が天皇の外戚として権力を持つて

いたので、地方に移住して国司となりました。国司の任期中は開墾によって私有地を拡大し、退任後はその土地に土着していきます。こうして、桓武平氏と清和源氏という二大勢力ができました。

### 源氏と鎌倉

関東では桓武平氏が勢力を拡大していく、平将門は関東地方を支配下に置くほどになりました。その他の桓武平氏は、枝分かれする形で常陸平氏、坂東八平氏(千葉・上総・三浦・土肥・秩父・大庭・梶原・長尾氏)などの豪族・武士団となりました。また、平安時代中期になると、桓武平氏は地元の有力者となり、在元四年(一二〇三年)に房総で起こった平忠常の乱を平定した源頼信の嫡男・頼義(頼朝の五代前)が、桓武平氏の流れをくむ平直方の娘婿となり、鎌倉の所領を譲渡されたことからです。平忠常の乱の後、桓武平氏は関東での影響力が弱まっています。天喜四年(一二〇五六六年)よ

り、頼義は陸奥守として陸奥の安倍氏の討伐を開始し、康平五年(一二〇六年)に平定しました(前九年の役)。翌年の康平六年(一二〇六三)に京都の石清水八幡宮(京都の裏鬼門)を鎌倉に勧請し、鶴岡八幡宮を創建します。

### 天皇家と摂関家の争い

寛治元年(一二〇八七)、白河天皇が上皇となつて政治の主導権を握る院政が始まります。白河上皇は、権力を持つていた藤原摂関家を抑えて院政を敷いたため、院に莊園の寄進が集中し、院と摂関家で権力の対立が起こります。この機に乗じて、伊勢平氏の正盛、忠盛は、土地の寄進を通じて白河上皇に接近し、西国の国司を歴任して勢力を伸ばしています。康和三年(一二〇二)に源義親(義家の子)が反乱を起こし、朝廷から追討令が出され、天仁元年(一二〇八)、追討の命を受けた平正盛が義親を討ち取ります。義親の死後、源氏は内紛が起こって勢力が衰え、平家が台頭します。

### 平治の乱

北条政子は挙兵した頼朝を支え、鎌倉幕府樹立に貢献した。頼朝の死後、嫡男・義家・次男・美朝が相次いで暗殺されたが、京都から迎えた幼い將軍の後見人となつて幕府の実権を握り、尼將軍と呼ばれた。伊豆の国市寺家守山1216



北条政子産湯の井戸



豆塚神社



伊豆の国市四日町字蛭島13

### 保元の乱

保元元年(一二五六年)に起こった保元の乱は、主に皇位繼承問題が原因でした。朝廷内で後白河天皇と崇徳上皇が対立し、源氏と平氏の武力が関与した政変です。この乱で活躍したのが後白河天皇方につきました。この乱では後白河天皇方につきました。この乱では後白河天皇が勝利し、為義は斬首、為朝は伊豆大島に配流となりました。また、平清盛は源義朝と共に後白河天皇方で戦いました。保元の乱で、武士の存在感が増し、武家政権が実現するきっかけとなりました。

保元の乱終結後、後白河天皇は平清盛を厚遇し、源義朝は不満が募っていました。清盛を引き立てたのは藤原信西(ふじわらのしんぜい)で、信西は恩賞を取り仕切る実権を握っていました。恩賞の不満は藤原信頼も抱いており、義朝と信頼は信西の殺害を企てます。平治元年(一二五九年)、二人は平清盛が京を留守している間に信西を殺害し、一条天

北条義時が再建したと伝わる。北条義時は父親の北条時政、姉の北条政子とともに源氏を助けながら鎌倉幕府の屋台骨を築き、頼朝亡き後に鎌倉幕府の実権を握る。伊豆の国市北江間3

皇、後白河上皇を幽閉するクーデターを起こした

のです。清盛は窮地に陥りましたが、天皇と上皇を奪還することに成功し、義朝、信頼は清盛の攻撃を受け、信頼は斬首され、義朝は東国で再起を図るために逃走したものの、尾張知多で家臣の騙し討ちに合い、非業の死を遂げます。

源頼朝は、父の義朝と逃走中にはぐれてしまい、美濃で平家方に捕らえられます。清盛は、継母の池禪尼（いけのぜんに）の懇願によって頼朝を助命し、伊豆の蛭ヶ小島に配流しました。

源頼朝は、父の義朝と逃走中にはぐれてしまい、美濃で平家方に捕らえられます。清盛は、継母の池禪尼（いけのぜんに）の懇願によって頼朝を助命し、伊豆の蛭ヶ小島に配流しました。

## 平家打倒で挙兵

永暦元年（一一六〇）、平治の乱の論功行賞により、平清盛は参議に、仁安二年（一一六七）には太政大臣に就任します。平家一門が高位高官に就き、清盛は自身の娘・徳子（建礼門院）を高倉天皇に嫁がせます。治承四年（一一八〇）二月、二人の子が天皇に即位し安徳天皇となり、清盛は自身の孫を帝位につけるという野望が実現したのです。平家一門が各国の国司や代行の目代に就任し、地方の在庁官人たちとの摩擦が拡大していきます。

治承四年（一一八〇）四月、後白河法皇の皇子・以仁王（もちひとおう）は、弟の高倉天皇に次ぐ皇位繼承者でしたが、安徳天皇が即位すると以仁王が皇位継承する可能性はほぼ絶望的になりました。以仁王は平家打倒の令旨（りょうじ）を全国に発します。同年八月、頼朝は挙兵し、結婚した

北条政子の父・北条時政とともに山木兼隆の館の襲撃を計画します。山木は国司の代理人である目代で、平家の意を受けて伊豆を支配していました。頼朝は北条館で挙兵し、深夜になると山木館に矢を放ち、勝利しました。

## 石橋山の戦いで敗北、房総に逃れる

山木館の戦いで勝利した頼朝は、伊豆から相模の国に向かい味方の相模衣笠城主の三浦義澄と合流する予定でした。ところが、平家側豪族の相模大庭を支配する（現在の神奈川県藤沢市）大庭景親らは頼朝の挙兵を朝廷への謀反とみなし、討伐軍を結成します。兵力は大庭軍が源氏軍の十倍で、戦力差が大きすぎるため源氏軍は山中に敗走します。頼朝は箱根神社に逃げ込み、数日滞在した後に真鶴岬から船で安房に向かいます。房総半島では千葉氏、上総氏が頼朝に味方することを表明していました。

治承四年（一一八〇）九月、頼朝は石橋山の戦いで敗れた痛手から立ち直り、鎌倉に向けて安房を出発します。安房、上総、下総、武藏と進軍を重ね、同調する武士団とともに各地の国府（古代の地方行政の拠点）を占拠し、支配地域を拡大していました。頼朝は同年十月に鎌倉に到着し、源氏の本拠地と定め、東海道を西に向け軍を進めて平家軍を迎え撃ち、富士川の戦いで平家に勝利し、東国を平定して鎌倉幕府を開くのです。

## 鎌倉幕府関係年表

年	源 頼朝	北条義時	事項
永久6年（一一一八）			平清盛、平忠盛の長男として生まれる
保安4年（一一二三）		1歳	源義朝、源為義の長男として生まれる
久安3年（一一四七）		10歳	源頼朝、源義朝の三男として生まれる
保元元年（一一五六） 7月		11歳	京都で保元の乱勃発
保元2年（一一五七）		13歳	北条政子、北条時政の長女として生まれる
平治元年（一一五九） 12月		14歳	京都で平治の乱勃発
永暦元年（一一六〇） 正月 3月			源義朝殺害される 頼朝、伊豆に配流
安元元年（一一七五）	17歳	1歳	北条義時、時政の次男として生まれる
安元2年（一一七六）	29歳	13歳	頼朝、北条時政の庇護を受ける
治承元年（一一七七）	30歳	14歳	頼朝、時政の娘政子と結婚
治承3年（一一七九） 6月	31歳	15歳	院近臣による鹿ヶ谷事件
治承4年（一一八〇） 11月	33歳	17歳	清盛による反平家勢力一掃の軍事クーデター
治承5年（一一八一） 5月26日 8月17日 8月23日 10月6日 10月20日	34歳	18歳	平家打倒を掲げて挙兵した以仁王敗死 頼朝挙兵 石橋山の戦いで敗北 安房に逃れた頼朝が鎌倉に入る 富士川の戦い 平清盛死去
寿永2年（一一八三） 閏2月4日	35歳	19歳	義仲、平家を俱利伽羅峰で破る
寿永3年（一一八四） 5月11日 7月25日 7月28日 閏10月 11月	37歳	21歳	平家都落ち 義仲入京 頼朝、朝廷から東国支配権を与えられる 義仲、後白河院を幽閉
元暦元年（一一八四） 1月21日 2月7日	38歳	22歳	義仲、頼朝が派遣した義経に討たれる 一ノ谷の戦い
元暦2年（一一八五） 2月18日～19日 3月24日 10月18日 11月11日～12日 11月28日	39歳	23歳	屋島の戦い 壇ノ浦の戦い 義経に頼朝追討の宣旨 頼朝に義経追討の宣旨 上洛中の北条時政、諸国に守護・地頭の設置、兵糧 米の徵収を朝廷に申し入れ～勅許
文治3年（一一八七） 10月29日	41歳	25歳	義経を匿っていた奥州平泉の藤原秀衡死去
文治5年（一一八九） 閏4月30日 7月 9月	43歳	27歳	藤原泰衡のため義経敗死 頼朝、奥州征伐に出陣 奥州平定～奥州藤原氏滅亡
建久元年（一一九〇） 11月	44歳	28歳	頼朝上洛 後白河院に拝謁 権大納言、右近衛大将に任命される 鎌倉に戻る際に辞任
建久3年（一一九二） 3月 7月	46歳	30歳	後白河院崩御 頼朝、征夷大將軍に任命
建久6年（一一九五） 3月	49歳	33歳	頼朝再上洛

「鎌倉殿の13人」主な登場人物  
〔一〇二三年 NHK 大河ドラマ〕

### 北条家

北条義時役・小栗旬

北条宗時役・片岡愛之助

北条時政役・坂東彌十郎

源氏

大姫役・南沙良

源行家役・杉本哲太

阿野全成役・新納慎也

源範頼役・迫田孝也

源頼朝役・大泉洋

源義経役・菅原将暉

武田信義役・八嶋智人

木曾義高役・市川染五郎

木曾義仲役・青木崇高

牧の方役・宮沢りえ

坂東武士	比企能員役・佐藤一朗	三浦義村役・山本耕史	土肥実平役・阿南健治	三浦義澄役・佐藤B作	仁田忠常役・高岸宏行	大江広元役・栗原英雄	幕府官僚	平清盛役・松平健	平宗盛役・小泉孝太郎	平家
	安達盛長役・野添義弘	安達盛長役・野添義弘	和田義盛役・横田栄司	三浦義澄役・佐藤B作	三浦義澄役・佐藤B作	三浦義澄役・佐藤B作		島山重忠役・中川大志	上総広常役・佐藤浩市	
			梶原景時役・中村獅童	仁田忠常役・高岸宏行	仁田忠常役・高岸宏行	仁田忠常役・高岸宏行		和田義盛役・横田栄司	梶原景時役・中村獅童	
			伊東祐親役・浅野和之	伊東祐親役・浅野和之	伊東祐親役・浅野和之	伊東祐親役・浅野和之		島山重忠役・中川大志	梶原景時役・中村獅童	
			善児役・梶原善	善児役・梶原善	善児役・梶原善	善児役・梶原善		上総広常役・佐藤浩市	和田義盛役・横田栄司	
			後白河法皇役・西田敏行	後白河法皇役・西田敏行	後白河法皇役・西田敏行	後白河法皇役・西田敏行			梶原景時役・中村獅童	
			平知康役・矢柴俊博	平知康役・矢柴俊博	平知康役・矢柴俊博	平知康役・矢柴俊博				
			巴御前役・秋元才加	巴御前役・秋元才加	巴御前役・秋元才加	巴御前役・秋元才加				

# 神社仏閣から INTERVIEW 歴史を学ぶ

# 金龍山 浅草寺

浅草寺一山 善龍院住職 清水谷 尚順師

浅草は東京都内屈指の観光名所で、浅草寺には連日多くの参拝者が訪れます。浅草寺では年中行事が頻繁に行われ、初詣の時期には表参道の仲見世から本堂まで、参拝者で埋め尽くされる賑わいをみせます。浅草寺一山善龍院住職の清水谷尚順師に、浅草寺の歴史と群馬県との関わりについてお話を伺いました。インタビュアー 木下直也

## 民衆の支持を集めたお寺



### 浅草寺は庶民のお寺という側面が強いことと同じ

時に、徳川将軍家の祈願寺でもあって、庶民が気楽にお参りてきて、かつ将軍様と同じご利益を得られるという、将軍家と民衆を結びつける親しみやすいお寺がありました。浅草寺は、二人の漁師が持ち帰った仏像を、土地の知識人が観音様であると知り、お祀りしたのが発祥です。地域の方々がご本尊をお祀りしたのが始まりのお寺で、皇族や武門が創建したのではなく、庶民の信仰から始まったのが特徴です。

浅草は庶民が集まり、賑わいのある門前町として栄え、江戸時代までは神仏習合でしたので、浅草寺に行くと色々な神様と仏様がいらっしゃり、「神仏のデパート」のようでした。浅草寺にお参りすると、色々な願い事が叶うとされ、多くの参詣者で賑わいました。その賑わいは現在でも続いております。

## 茂林寺（群馬県館林市）と 同様の二尊仏が境内に

上野国（群馬県）と浅草寺の仏縁といたしましては、浅草寺境内の二尊仏の由縁をご紹介したいと思います。この二尊仏の願主は、上野国館林在大久保村の高瀬善兵衛で、同様の仏像が群馬県館林の分福茶釜で有名な茂林寺さんにもあるのです。善兵衛は、利根川の舟運で財を成した廻船問屋で、観世音菩薩像と勢至菩薩像は、かつての奉公先の亡き主人の菩提を弔うためとその一家の繁榮を願い造立したと台座に記載されています。製作は貞享四年（一六八七）で、神田鍋町の太田久右衛門の作です。茂林寺さんの観世音菩薩像は作者も同じです。茂林寺さんと浅草寺に、大変有難い同じ仏様があるということでも深い縁を感じます。

## 鎌倉時代から坂東の主要地域だった浅草

徳川家康公が江戸に幕府を開いた後、この地域は大きく発展しますが、それまでは坂東（関東地方）の今でいう地方都市の一つでした。源頼朝公が平家追討で関東各地から兵を集め際、浅草の今戸に集結し、浅草寺を参拝し、大軍を率いて鎌倉に向かってとされています。また、鎌倉時代に造られた鶴岡八幡宮を建てた宮大工の多くは、浅草から出張してきました。

ました。

家康公が江戸に入ってきた時、浅草寺を祈願所にされたことは、江戸では一番古い歴史があり、鎌倉時代から源氏一族に崇敬される由緒の深い寺であったからだと思います。家康公は、関ヶ原の戦いの時にも浅草寺で戦勝祈願をして、お札を関ヶ原まで届けさせたと伝わっています。



### 雷門（かみなりもん）

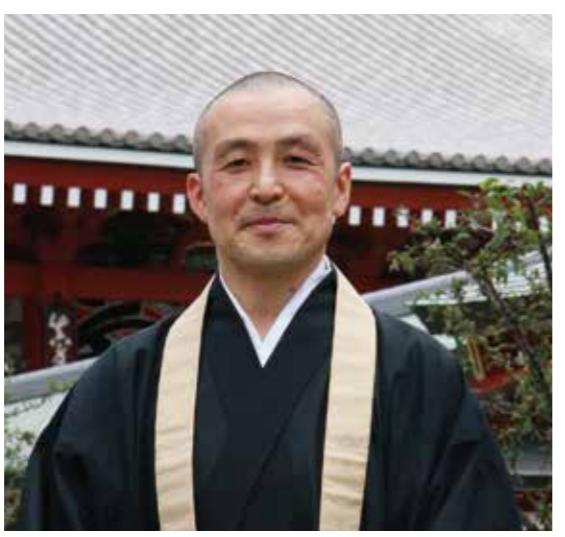
雷門は浅草寺の総門で、正式名称は「風雷神門」といい、門の左右に風神と雷神を奉安していることに由来します。慶安2年（1649）に徳川家光公により火事で焼失した雷門が再建されましたが、明和4年（1767）に近隣の火災から延焼して焼失、寛政7年（1795）に再建されます。この頃から提灯の奉納が行われるようになりました。

慶応元年（1865）には田原町からの失火で雷門は焼失し、現在の門は昭和35年（1960）に松下電器産業（現・パナソニック）社長の松下幸之助氏の寄進により再建されました。当時、松下氏は関節痛を患っていましたが、それを聞いた清水谷貫首（かんす）が、「本尊に祈願したところ快復し、その御礼に松下氏個人で寄進されたものです。」



### 宝蔵門（ほうぞうもん）

雷門から仲見世を進むと本堂の手前に山門の宝蔵門があります。仁王像が安置されていることから、この門はもともと仁王門と呼ばれており、天慶5年（942）の創建と伝わります。以来、数度の焼失と再建を経て、徳川家光公の寄進により、慶安2年（1649）に落慶した仁王門が、昭和20年に空襲で焼失、昭和39年（1964）に再建されました。経典や寺宝を収蔵することから、宝蔵門と名付けられています。



### 浅草寺 教化部執事 清水谷 尚順（しみずたに しょうじゅん）師

昭和48年生まれ。平成7年大正大学仏教学部天台学卒業。平成12年浅草寺一山善龍院住職。令和3年より浅草寺教化部執事。

# 浅草寺の歴史

History of  
Sensoji

## 「本尊の示現」

浅草寺は千四百年近くの歴史を持つ観音靈場です。ご本尊が示現したのは飛鳥時代の推古天皇三年(六一八)で、宮戸川(現在の隅田川)のほとりに住む漁師の檜前浜成・竹成(ひのくまのはまなり・たけなり)兄弟が海中からご本尊を引き揚げました。土知中知(はじのなかとも)といふ土地の長に見てもらうと、聖觀世音菩薩の尊像だとわかりました。浅草寺に伝わる縁起には、觀音様示現の日から三日たつと、觀音様をお守りすべく天から金の鱗をもつ龍が松林の中にくだつたと記されています。この瑞祥が、後につけられた山号「金龍山」の由来となりました。

ご本尊が示現して十七年を経た大化元年(六四五)、勝海上人が觀音堂を修造した際、上人の夢に觀音様が現れ、「みだりに拝するなけれ」とのお告げがあり、以来今日まで、ご本尊は絶対秘仏として寺の住職さえも目にし得ません。

## 源頼朝の参詣

鎌倉幕府の公式記録である「吾妻鏡」には、觀音様を篤く信仰する源頼朝は、治承四年(一一八〇)、平家追討の戦陣を進めて下総(現在の千葉県北部と茨城県の南部)から武藏国へ入った時に、浅草寺で勝利を祈願したと記録されています。また、文治五年(一一八〇)に堂塔を再建しました。徳川家康は、天文八年(一五三九)に江戸に入府すると、家康が信任する天海大僧正の進言に基づき、浅草寺を祈願所に定めました。

## 足利尊氏、徳川家康も崇敬

室町時代から安土桃山、江戸時代にかけても、靈験あらたかな寺として浅草寺の名は各地に知れ渡り、足利氏、後北条氏、徳川氏をはじめ、有力武将の崇敬を集めました。観応三年(一三五二)、足利尊氏は浅草寺を参詣し、寺領を安堵しました。小田原城主の北条氏綱は、浅草寺を祈願所とし、天文八年(一五三九)に堂塔を再建しました。徳川家康は、天文八年(一五三九〇)に江戸に入府すると、家康が信任する天海大僧正の進言に基づき、浅草寺を祈願所に定めました。

## 庶民文化の拠点・浅草

江戸時代の浅草は、江戸有数の盛り場となり、浅草寺本堂の北西には見世物小屋が立ち並び、「奥山」と呼ばれ、辻講釈、居合い抜き、手妻(奇術)など、現代の大道芸のような興行が催されました。このような曲芸は江戸中の評判となり、参詣人はもとより、徳川將軍が鷹狩の帰りに浅草寺に立ち寄り、曲芸を楽しんだという記録も残っています。

明治維新後、境内の一部は公園(浅草公園)に指定され、行政区画の一区から七区に分けて整備されました。江戸時代に奥山で興行していた見世物小屋は、新たに造成された六区に移転し、六区には明治時代末期からは映画館が軒を連ね、東京屈指の歓楽街が形成されました。(参考文献:「浅草寺」金龍山浅草寺発行)



「柳の御影(やなぎのみえい)」

慈覚大師の御作である御影版木で刷られたご本尊の姿。



五重塔(ごじゅうとう)

浅草寺五重塔の最上層には、昭和41年(1966)にスリランカのイスルムニヤ王立寺院から奉戴した仏舍利が納められています。他の層には、ご信徒の奉安による「五輪宝塔」が安置され、塔院四方に配されている靈牌殿には、ご信徒が永代供養のために納めた位牌が安置されています。

## 伝法院(でんばういん)

仲見世の西側に広がる回遊式庭園。寛永年間(1624~44)に作庭家の小堀遠州により築庭されたと伝わります。客殿には阿弥陀三尊像が奉安され、その左右には徳川歴代将軍、浅草寺中興歴代住職の位牌が安置されています。



「金龍山浅草寺境内図」昭和15年

本堂・觀音堂(ほんどう・かんのんどう)  
浅草寺の本堂は、ご本尊の聖觀世音菩薩を奉安していることから、觀音堂とも呼ばれています。本堂は失火や落雷などで現在まで20回近く再建され、慶安2年(1649)に徳川家光公が願主となつて再建された本堂は約300年にわたり觀音信仰の中心を担いました。この本堂は国宝指定されたものの、昭和20年(1945)の東京大空襲で焼失しましたが、全国のご信徒からご淨財により、昭和33年(1958)に現在の本堂が再建されました。

# 中塚古墳・武井廃寺塔跡

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員

多田宏太

## 墳墓が語る新川の歴史

中塚古墳は桐生市新里町新川にあり、赤城山南麓の丘陵上に立地します。標高は200m程で、新川一帯を見渡せる位置に造られています。



図1・写真1 中塚古墳の石室。精緻に組まれた石材は压巻の見ごたえ。

本古墳は一辺37mの規模を有する方墳です。墳丘は5mで、石室の入り口付近は一部削られています。石室の開口方向は南側で、かなり以前から開けられていたようです。そのため、副葬された遺物は分かっていません。石室は安山岩を用いた横穴式石室で羨門と玄門を備えています。羨道は長さ3.1m、幅1.3m程です。現状で人がしゃがんだ姿勢でぎりぎり通れる程度の高さがあります。玄室は長さ4.16m、幅1.76mです。埴輪は見つかっていません。年代は後述する石室の形態などから7世紀に造られたと考えられています。

この遺跡の最大の特徴は複雑な形に

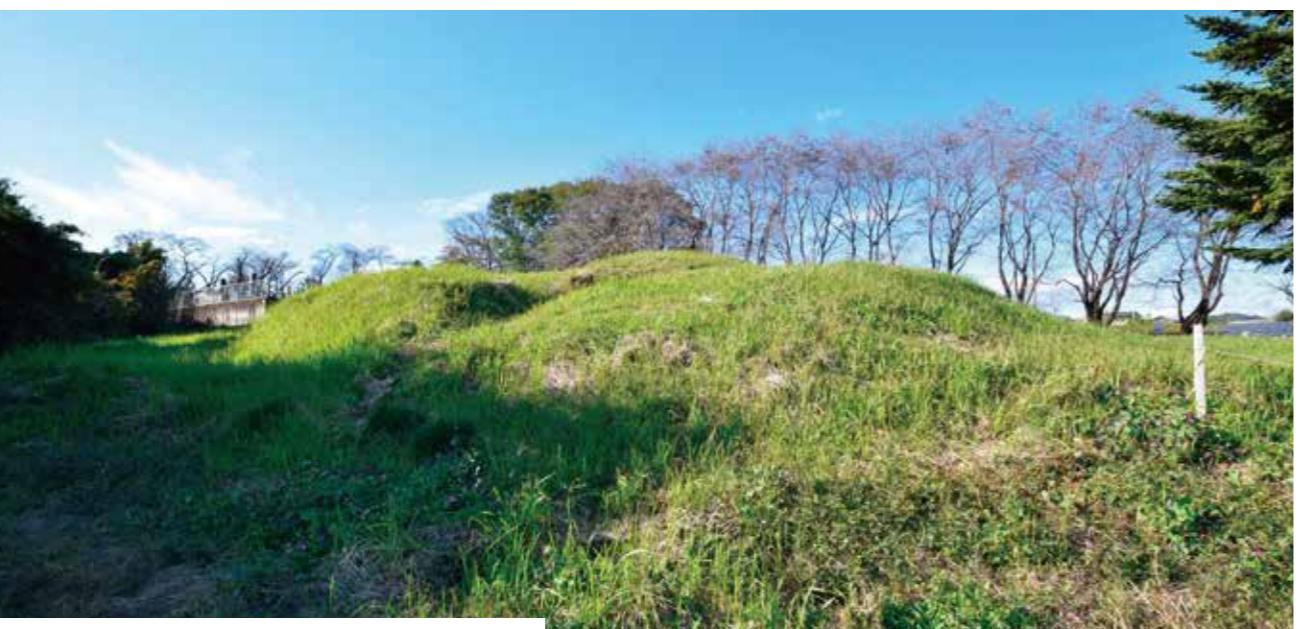


写真3 中塚古墳の全景。住宅街に囲まれた中にひっそりとたたずむ。写真中央のへこみには石室の開口部がある。



写真4 武井廃寺塔跡。この下に八角形の墳丘が見つかった。

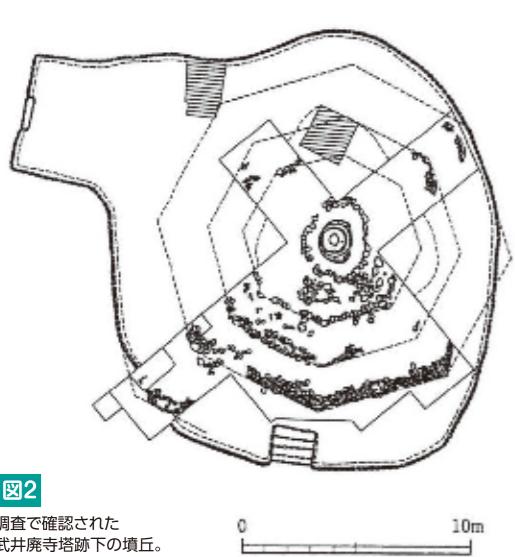


図2  
調査で確認された  
武井廃寺塔跡下の墳丘。

中塚古墳の年代はその石室の構造から7世紀に位置付けられていますが、681年に建てられた上野三碑の二つ「山上碑」（高崎市山名町）の碑文には新川臣と大児臣の婚姻関係や系譜が記されています。新川臣は中塚古墳のある新川周辺にいた豪族と考えられており、古墳と碑の建立年が近いことなどから、中塚古墳は新川臣の墳墓であると考えられています。中塚古墳を見たら一緒に歩いて頂きたいのが、武井廃寺塔跡です。

円錐状の加工石は塔の中心礎石であるとの見解から、これは古代寺院の跡とされ、武井廃寺塔跡として昭和16年に国指定史跡になりました。しかし、所在地は標高210mの丘陵性台地の尾根上にあり、かなりの傾斜地であることや他の寺院関連の遺構も見つかっていないことから、長い間寺院の塔跡とすることが疑問視されてきました。

昭和44年の調査で八角形三段の石積の墳丘が発見されたことがきっかけとなり、現在は奈良時代の火葬墳墓とする見解が強く支持され、加工石のくぼみの中に納骨したと考えられています。

新里駅から中塚古墳へは歩いて15分ほどで、中塚古墳と武井廃寺塔跡は150m程の距離にあります。道が少し入り組んでいるのでわかりづらいですが、古墳に近くになると案内看板が出ています。駅から歩く方は少し距離があるので、ウォーキングに使う程度の動きやすい服装で行くのがおすすめです。ぜひ一度見学に訪れてみてはいかがでしょうか。



写真2 中塚古墳の解説。すこし奥まったところにある。

切り出した石をジグソーパズルのように積み上げた石室です。このような積み方はきり石切組積みと呼ばれ、主に7世紀の古墳に用いられた形態です。このようないしを有する古墳は桐生市では他に新里中央小学校の校内にある天神古墳や新里町閑にある長者塚古墳などの例があり、群馬県全域に目を向けてみると前橋市総社町にある宝塔山古墳や蛇穴山古墳など比較的大きな古墳にも用いられています。

# 松本忠義

美術研究家 染谷滋

## 県内作家に大きな影響

一〇〇八(平成二〇)年一〇月一七日、松本忠義は百歳の誕生日を二ヶ月半後に控えてこの世を去った。「生涯、一画学生」が口癖で、いつも絵を描くことだけを考え、社会的名声や生活を良くすることなどには無関心な、「絵描きの中の絵描き」と呼ぶ存在だった。戦前に建てられた高崎市竜見町のアトリエは、所々天井が抜けるまで長い年月使われ、晩年になるまで電話を入れない生活を続けていた。

それでも画家を目指す多くの若者がこのアトリエに通い、高崎市内はもとより、市外からも松本忠義の画塾に学んだ者は数え切れない。以前このシリーズでも紹介した正田壌もその一人だ。

## 東京での絵画修業

松本忠義は一九〇九(明治四二)年一月一日、高崎市八島町に生まれた。忠義は「ただよし」と読むのが正しいが、画家仲間は親しみを込めて「ちゅうぎさん」と呼んだ。

旧制高崎中学在学中、二年上級に山口薰、同級生には豊田一男、一年下に分部順治、二年下には小林良曹といった顔触れが並び、のちに群馬や日本の美術も本業の絵の道では、子供から大人まで教えた画塾で多くの人材を育てた。

松本のように故郷を活動拠点とする才能ある画家たちが、戦後の群馬でも次第に増え、群馬画壇と呼べるような文化的環境が整い始めていた。高崎では松本のほかに中村節也や豊田一男、前橋では南城一夫や清水刀根、近藤嘉男などの存在である。

## 画風の変遷と確立

松本忠義は戦後、山口薰の推挙で自由美術家協会の会員となつたが、主体美術協会が創設されるとその結成に参加し、長らく主体美術協会に属した。それでも、松本の活動拠点は高崎にあつた。

「生涯、一画学生」を自認していた松本の画風は、影響を受けた画家の作風を色濃く反映している。初期には山口薰風の作品もあれば、ベルギーのシユールレアリスト、ポール・デルボーを思わせるものもあり、後半生にはドイツの画家、パウル・ランダーリッヒの影響が顯著だ。

それでも、どの作品にも松本忠義のイメージと独創が加わっていて、美術作品に不可欠なオリジナリティには事欠かない。その点では、紛れもなく松本忠義の作品になつてゐる。

界を背負つて立つ多くの友人に恵まれ、松本も絵の道に進むことになった。

松本家は代々高崎駅構内で駅弁を扱う弁当店を経営していたが、二男だった松本忠義は、高崎中学卒業後父親の反対を押し切つて一九歳で東京に出、「九年展」で公募した「一九三〇年協会展」で画技を磨いた。

この洋画研究所はパリから帰国したばかりの里見勝蔵や前田寛治、佐伯祐二らが指導していて、かれらが中心となって公募した「一九三〇年協会展」は第五回展まで開催され、当時の日本洋画壇で大きな注目を浴びていた。

松本はこの一九三〇年協会展の第四回と五回展に連続して入選しているが、この歴史的な展覧会の入選者に名を連ねているだけで、美術ファンにはワクワクする出来事だ。

一九三二(昭和七)年、一三歳の松本は四年間の東京生活を終えて高崎に戻った。

## 群馬画壇の搖籃期

松本忠義が高崎に戻った理由のひとつには、高崎の実業家井上房一郎がパリ留学から帰国し、様々な文化活動を始めたからだと、以前松本は筆者に語つ

たことがある。高崎に居ても絵は描き続けられるという

思いが、松本を郷里に引き留めた。実際井上は、高崎の多くの美術家たちのパトロンとしてその活動を支援しただけでなく、戦後には県立近代美術館の設置運動に尽力す

るなど、数多くの文化活動に多大な貢献をした。

井上のような文化人が周囲に居たものの、松本の生活は決して楽ではなかつた。竜見町にアトリエ付きの家を建てるに、畑で農作物を育て、牛も飼つて酪農も行つた。飼つていたシェパードのブリーダーとしての才能は、人を指導するほどになつて、何よりも本業の絵の道では、子供から大人まで教えた画塾で多くの人材を育てた。

松本のように故郷を活動拠点とする才能ある画家たちが、戦後の群馬でも次第に増え、群馬画壇と呼べるような文化的環境が整い始めていた。高崎では松本のほかに中村節也や豊田一男、前橋では南城一夫や清水刀根、近藤嘉男などの存在である。

**モチーフには見慣れた日常生活の断片が取り込まれ、高崎の街並みやアトリエ近くの鳥川、榛名の山並みが見られることがあるが、作者の幻想的なイメージネーションが自由に羽を広げる作品が多い。**

大変な動物好きで、犬や猫、小鳥やフクロウまで飼つていたから、作品にもこれらの動物が頻繁に登場する。中でもフクロウの連作はよく知られている。

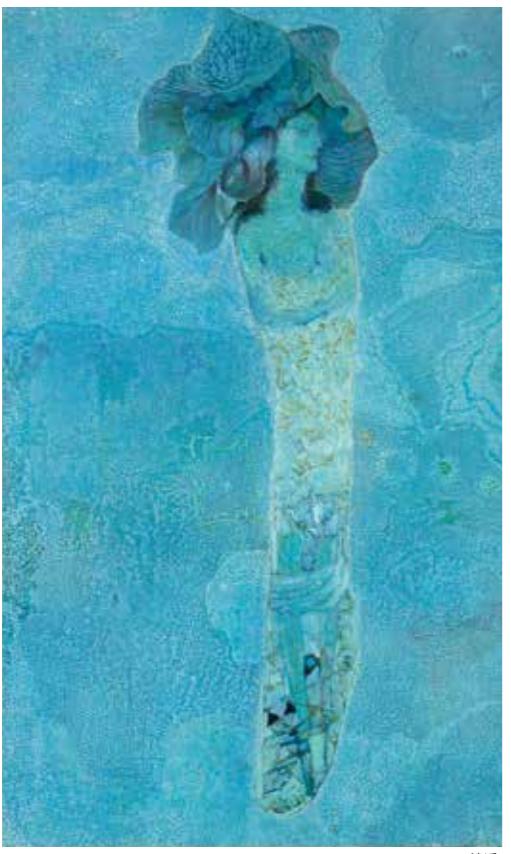
## 忘れたくない画業

松本忠義は自作の大半を高崎市美術館に寄贈した。当時、高崎市美術館の館長を務めていた巣山健は、少年の頃松本画塾に学んだ教え子であつたから、高崎市美術館での松本忠義展の開催にはある種の必然性もあつた。

生前、個展を開催した前橋の煥平堂ギャラリーも閉じ、松本忠義も巣山館長もこの世を去つて、松本作品を目にの機会が減少している。高崎市美術館が収蔵作品を活用した展示をする際に、ときおり見かけるくらいだ。

実は株式会社ヤマトにも数多くの作品がコレクションされていて、社内に展示されている。人目につきやすい1階のホールでもよく見かけるし、ギャラリーでまとめて展示されることもある。

作品が人目に触れている限り、画家は生き続けているということを忘れないでいた。



フローラの遺産

略歴 松本忠義 TADAYOSHI MATSUMOTO	
1909	1月1日、高崎市八島町に生まれる
1927	旧制高崎中学卒業
1928	上京して絵画修行
1929	第4回1930年協会展に初入選
1932	高崎に帰郷、高崎洋画協会の結成に参加
1935	第22回二科展に初入選
1938	この頃、竜見町にアトリエ付きの家を建てる
1947	畑と牛小屋を作り、農業と酪農に従事
1947	山口薰の勧めで自由美術家協会会員となる
1955	群馬シェパード犬訓練研究俱楽部の指導員となる
1957	高崎・珍竹林画廊で初個展
1964	主体美術協会結成に参加
1973	銀座の2会場で個展
1977	群馬県立近代美術館「群馬秀作美術展」に出品
1980	前橋・煥平堂で「松本忠義展」、以後何度も開催
1995	群馬県立近代美術館「群馬の作家たち」に出品
1997	高崎市美術館で「松本忠義展」開催
2001	高崎市美術館に111点の作品を寄贈
2002	高崎市美術館で3期に分けて「松本忠義展」開催
2005	高崎市文化賞受賞
2008	10月17日、99歳で死去



梟と三匹の子猫

# 絶景日帰り温泉 龍宮殿本館 様



(上写真 女性用露天風呂・下写真 女性用風呂)



雄大な芦ノ湖の自然と一体となるようなダイナミックな景色と、富士山を同時に望むロケーションが特徴。

龍宮殿本館 施設概要	
名 称	絶景日帰り温泉 龍宮殿本館
営業時間	ご宿泊のお客様：午前6時～午後8時(最終入館 午後7時) 外来のお客様：【平日】午前9時～午後8時 【土休日】午前8時～午後8時
料 金	お食事処：午前11時30分～午後3時30分(ラストオーダー午後3時) 外来的お客様：おとな2,030円 小学生1,100円 ご宿泊のお客様：無料
※季節により営業時間が変更になる場合がございます。	

施設内容	【男湯・女湯共用】温泉(内湯・露天)・洗い場・パウダールーム 【男湯のみ】スチームサウナ・レインシャワー・女性専用湯休処 【付帯施設】男女共用湯休処・個室湯休(4室)・バーティールーム
お食事処	「富士」・マッサージルームわくわく
料 金	お食事処「富士」・マッサージルームわくわく
外来的お客様	力ルシウム・ナトリウム・硫酸塩・塩化物泉
ご宿泊のお客様	神經痛・筋肉痛・関節痛他

ア クセス	お客さまからのお問合せ先 絶景日帰り温泉龍宮殿本館 TEL：0460-83-1126 URL： <a href="http://www.princehotels.co.jp/ryuguden/honkan/">http://www.princehotels.co.jp/ryuguden/honkan/</a>
-------	---

お客様  
インタビュー

## 龍宮殿本館の歴史



ザ・プリンス 箱根芦ノ湖  
箱根園・箱根園ゴルフ場・龍宮殿  
総支配人 鴻野 篤 様

著名人がこのホテルを利用したと言われています。

しかしこのホテルは先進的過ぎて、そ

の上あまりにも高級指向であったこと

や、戦争の足音が聞こえる時代背景もあ

り、経営的にはあまりうまくいかなか

ったようです。創業からわずか1年半後

の昭和14年(1939年)10月、同ホテル

は休業を余儀なくされます。戦時中は

軍部の施設となり、終戦後は浜名湖畔に

ひつりとたたずんでいました。

その後、浜名湖畔から芦ノ湖畔への移築が決まりました。移築のための解体作業は多難で、およそ5ヶ月を費やしました。当時はまだ自動車道路が未発達だったため、解体された資材の大半は東海道本線の貨車を使用して熱海駅まで運搬され、まだ舗装されていない十国峠を越えました。やっと芦ノ湖畔に到着した後も、復元作業にも多くの人手と時間を必要としました。

その後、浜名湖畔から芦ノ湖畔への移築が決まりました。移築のための解体作業は多難で、およそ5ヶ月を費やしました。当時はまだ自動車道路が未発達だったため、解体された資材の大半は東海道本線の貨車を使用して熱海駅まで運搬され、まだ舗装されていない十国峠を越えました。やっと芦ノ湖畔に到着した後も、復元作業にも多くの人手と時間を必要としました。

龍宮殿として復活、新たな歴史を刻む

平成23年(2011)3月11日に大き

な被害をもたらした東日本大震災が発

生しました。龍宮殿本館への影響は軽微

でしたが、お客様の安全・安心を優先

し閉館することとなりました。こうして

本館は旅館としての役目を終え、別館の

みでの営業を続けてきました。

閉館から6年が経った平成29年

(2017)7月22日、本館は日帰り温

泉施設にリニューアルオープンしました

が、当施設は、雄大な芦ノ湖の自然が間

近に広がり、同時に富士山を望む「絶景

温泉」にふさわしいロケーションです。歴

史ある建物で箱根の湯に浸かりながら、

上質なひとときをお過ごしいただけた

らと思います。(2021年9月14日取材)

その後、浜名湖畔から芦ノ湖畔への移築が決まりました。移築のための解体作業は多難で、およそ5ヶ月を費やしました。当時はまだ自動車道路が未発達だったため、解体された資材の大半は東海道本線の貨車を使用して熱海駅まで運搬され、まだ舗装されていない十国峠を越えました。やっと芦ノ湖畔に到着した後も、復元作業にも多くの人手と時間を必要としました。

龍宮殿として復活、新たな歴史を刻む

平成23年(2011)3月11日に大き

な被害をもたらした東日本大震災が発

生しました。龍宮殿本館への影響は軽微

でしたが、お客様の安全・安心を優先

し閉館することとなりました。こうして

本館は旅館としての役目を終え、別館の

みでの営業を続けてきました。

閉館から6年が経った平成29年

(2017)7月22日、本館は日帰り温

泉施設にリニューアルオープンしました

が、当施設は、雄大な芦ノ湖の自然が間

近に広がり、同時に富士山を望む「絶景

温泉」にふさわしいロケーションです。歴

史ある建物で箱根の湯に浸かりながら、

上質なひとときをお過ごしいただけた

らと思います。(2021年9月14日取材)

わが國屈指の高級ホテル

今から3年前の昭和13年(1938年)、飛島組(現在の飛島建設)の先代社長であった飛島繁氏が、静岡県の浜名湖に先進的な「浜名湖ホテル」を開業しました。宇治の平等院をモデルにして、當時わが国屈指の高級ホテルとして評判になりました。建物外観は純和風でありながら、客室はすべてベッドを備えた洋室、食事はフランス料理という先進的なスタイルでした。

木造2階、一部3階建て、総工費は当時の金額で40万円(ボイさんの月給が10円)と破格でした。その時代の交通手段は東海道本線のみでしたから、列車で訪れたお客さんは弁天島駅で降り、そこからホテルまでの送迎には典雅な馬車が使われ、皇族をはじめ、当時の多くの

著名人がこのホテルを利用したと言われています。

しかしこのホテルは先進的過ぎて、その上あまりにも高級指向であったことや、戦争の足音が聞こえる時代背景もあり、経営的にはあまりうまくいかなかったようです。創業からわずか1年半後の昭和14年(1939年)10月、同ホテルは休業を余儀なくされます。戦時中は軍部の施設となり、終戦後は浜名湖畔にひつりとたたずんでいました。

その後、浜名湖畔から芦ノ湖畔への移築が決まりました。移築のための解体作業は多難で、およそ5ヶ月を費やしました。当時はまだ自動車道路が未発達だったため、解体された資材の大半は東海道本線の貨車を使用して熱海駅まで運搬され、まだ舗装されていない十国峠を越えました。やっと芦ノ湖畔に到着した後も、復元作業にも多くの人手と時間を必要としました。

龍宮殿として復活、新たな歴史を刻む

平成23年(2011)3月11日に大きな被害をもたらした東日本大震災が発生しました。龍宮殿本館への影響は軽微でしたが、お客様の安全・安心を優先し閉館することとなりました。こうして本館は旅館としての役目を終え、別館のみでの営業を続けてきました。

閉館から6年が経った平成29年(2017)7月22日、本館は日帰り温泉施設にリニューアルオープンしましたが、当施設は、雄大な芦ノ湖の自然が間近に広がり、同時に富士山を望む「絶景温泉」にふさわしいロケーションです。歴史ある建物で箱根の湯に浸かりながら、

上質なひとときをお過ごしいただけた

らと思います。(2021年9月14日取材)



歴史と豪華さを体感できる龍宮殿本館の内部



豪華な造りの龍宮殿本館